

おゆみ野の古墳群

白井 久美子

1 古墳群の分布と範囲

おゆみ野（以下千葉東南部地区とする）で行われた300基におよぶ後・終末期古墳群の調査は、市原台古墳群に並ぶ東日本最大規模の例である。さらに、その造営に関わった集落のほぼ全容を明らかにした全国的にも希有な調査例といえる。千葉東南部地区の古墳群は、小規模な墳丘が群在する後・終末期の群集墳が主体である。調査の対象となった古墳群は30支群307基、古墳時代の集落は38か所におよんでいる。古墳群の報告は刊行された40冊の報告のうち31冊に収録されており、現代まで墳丘が遺っていた古墳のほかに集落の調査で明らかになった小規模な古墳が相当数含まれている。後者は元々墳丘が低かったため開墾等によって墳丘が失われ、集落の調査によって姿を現した例である。このように、従来の分布調査では知るよしもなかった古墳の解明は、調査面積約70%におよんだ大規模調査の賜物のひとつといえるであろう。

古墳群は旧千葉市生実町・南生実町・椎名崎町・小金沢町を中心に分布し、村田川河口低地に面した赤塚支谷・泉支谷・小金沢台支谷・大金沢支谷と呼ばれた4つの谷に沿って立地していた。最も深く入り込んだ泉支谷を境に遺跡の内容が異なり、北側の生実・南生実町とその周辺では前期から中期の遺跡が中心であるのに対し、南側の椎名崎・小金沢町周辺は圧倒的に後期以降の例が多い。このような分布状況から、地区内の古墳群を総称する場合は生実・椎名崎古墳群として報告した（白井 1986, 2003）。

ここでは調査古墳全体を概観し、関東の後・終末期古墳群の代表的な調査例の特質を報告したい。

2 古墳群の変遷

調査古墳の一覧は、椎名崎古墳群B支群の報告書（『千葉東南部ニュータウン35』）に示したが、事業地内で調査した古墳の他、群形成に関わる大型古墳として七廻塚古墳（1、以下小林論文第1図の番号を示す）、

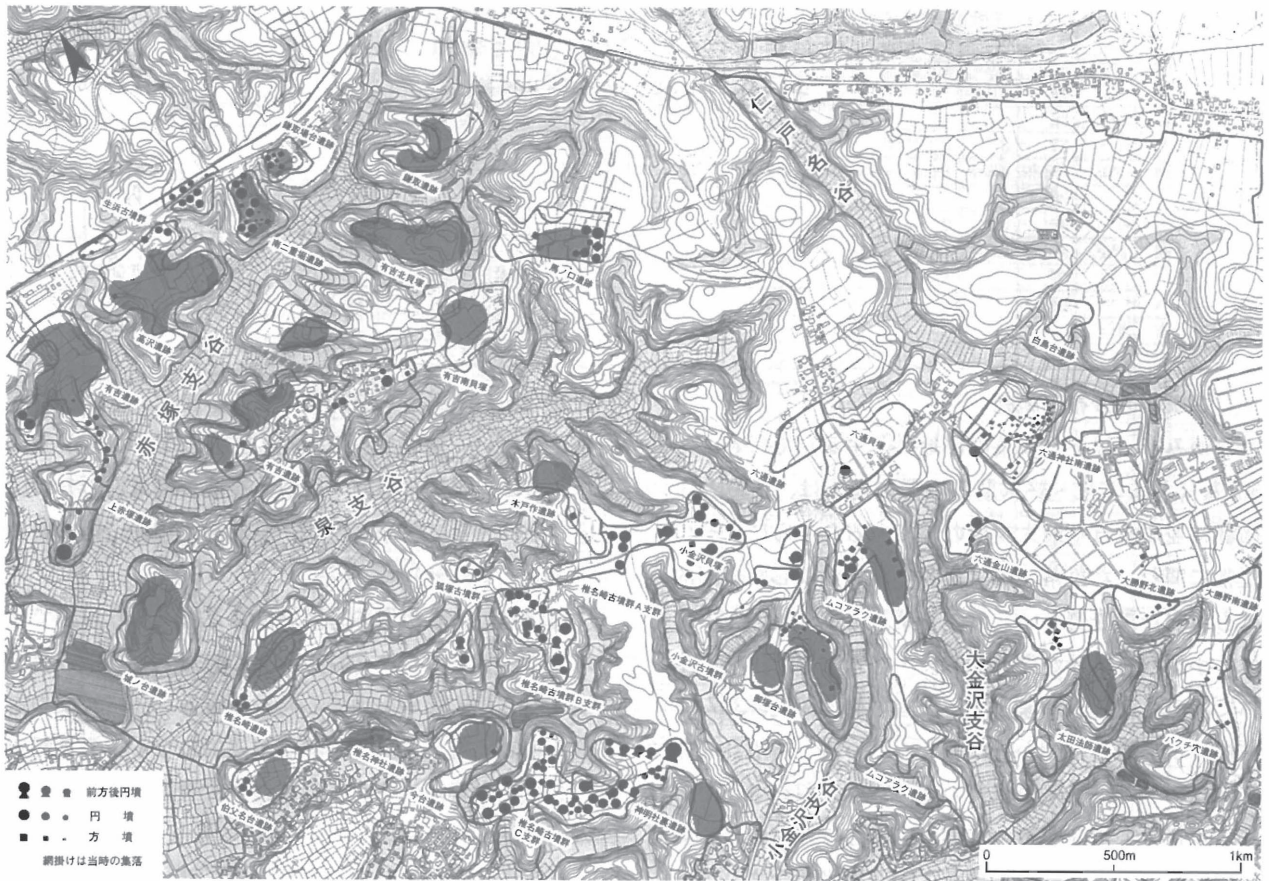
大覚寺山古墳（2）を加えている。また、今回若干の修正を行い、総数309基の構成を示した。時期区分については出現期・前期・中期・後期・終末期の5期区分とし、さらに前期・中期・後期をI・II、終末期をI・II・IIIに分けた。

出現期は弥生後期の方形周溝墓とは異なり単独で立地する方墳が現われ、特定地域の拠点に大型前方後方墳・前方後円墳が出現する時期である。一定規模の古墳で鉄製武器・利器の副葬が普遍的になる。2世紀末～3世紀中葉に比定しており、本古墳群ではこの時期の例は見られない。

前期Iは定型化した前方後円墳・前方後方墳と方墳で構成される時期で、円墳が加わる前期IIと区別した。装飾壺に替わって無文の二重口縁壺が台頭し、房総にも銅鏡の副葬が波及する。本古墳群では馬ノ口遺跡（11）に比較的大型の方墳があるがわずか3基の小規模な群である。

前期IIでは底部を穿孔した壺を墳丘に用いる例が普及する。富岡古墳群（20）にこの時期の方墳・円墳があり、方墳から円墳への変換期にあることがうかがえる。河口北西部の台地上には千葉市最大の前方後円墳である大覚寺山古墳が所在する。前方部が低く短小な墳形と埴輪が存在しない点で前期古墳と考えられている。墳形は底部穿孔壺を出土した市原市今富塚山古墳（112m）や壺形埴輪と特殊な円筒埴輪をもつ多古町しゃくし塚古墳（86m）に類似しており、前期IIの当地を代表する古墳である可能性が高い（白井 2004）。前期Iを3世紀中葉～4世紀初頭、前期IIを4世紀初頭～後葉と捉えている。

中期Iは前方後方墳が姿を消し、大型円墳が地域の中核的な古墳として築かれるようになる時期である。本古墳群では墳丘径54mの七廻塚古墳（1）・径31mの上赤塚1号墳（3-1）が河口低地に面した台地の前面に出現し、石製模造品・鉄製農具が副葬品の主体となる。石製立花・石枕など常総地域に特徴的な石



第1図 古墳時代の遺跡分布図

製品が出土している点は注目される。また、西原古墳群(18)のような15m規模の古墳群も台地の先端に営まれ、円墳群の中に方墳が残存している。

中期Ⅱは須恵器の副葬が本格化し甲冑など朝鮮半島系の新式の文物を副葬する時期である。この段階で方墳は姿を消し、前方後円墳と円墳で古墳群が構成されるようになる。房総最大の前方後円墳(富津市内裏塚古墳)をはじめ、各地を代表する大型前方後円墳が築造される時期であるが、本古墳群には前方後円墳が存在していない。『千葉市史史料編』(千葉市史編纂委員会 1976)に拠れば、大覚寺山古墳周辺に複数の前方後円墳(峠の台古墳、瓢箪塚古墳群)が分布したことが記されており、概期の前方後円墳が存在した可能性はある。後半になると房総の中小規模の古墳に甲冑の副葬が目立つようになるが、本古墳群には出土例がなく、有吉遺跡(5)・鎌取場台遺跡(9)・椎名崎C支群(16)に散見される該期の小円墳は副葬品が明らかではない。なお終末期Ⅰの古墳群にあって小型の獣毛文鏡を出土した小金沢24号墳(22-11)も中期にさかのぼると考えられる。中期Ⅰを4世紀後葉～5世紀初

頭、中期Ⅱを5世紀前葉～末葉に位置づけられよう。

後期Ⅰの房総は全般的に前方後円墳の規模が縮小し、造墓活動が縮小する傾向にあり、本古墳群もその例外ではない。概期の例は高沢古墳群(6)・椎名崎古墳群C支群で調査された5基にとどまる。椎名崎C支群では墳丘長25.3mの造り出し付き円墳のほか中小規模の円墳3基が築かれている。中期と同様に前方後円墳は見当たらず、30mを超える規模の円墳も見つかっていない。

後期Ⅱになると、房総のほぼ全域で再び大型前方後円墳が築かれ、造墓活動が活発になる。本古墳群が本領を発揮するのもこの段階からである。前方後円墳3基・帆立貝形前方後円墳4基・円墳24基がこの時期に位置づけられる。後・終末期古墳群の中核を成す椎名崎古墳群B支群の築造が始まり、人形塚古墳(15-1)の築造もこの時期に該当する。古墳の分布状況を見ると、有吉遺跡(4)・高沢古墳群(6)・南二重堀遺跡(8)・椎名崎古墳群(12・14～17)・富岡古墳群(20)など、赤塚支谷の右岸と泉支谷の南東に張り出した本地区中央部の台地上に集中し、この2地点が造墓の中

表1 千葉東南部ニュータウンの古墳

報告書No.	遺跡名 時期	古墳				前期 I	前期 II	中期 I	中期 II	後期 I	後期 II	終末期 I	終末期 II	終 III	不明	計
		集落	弥生中期	弥生後期	古墳出現期	古墳前期	古墳中期	古墳後期前半	古墳後期後半	奈良・平安						
	七廻塚						1								1	
	大覚寺山						1								1	
13・31	上赤塚						2								5	7
3・5	有吉1～2次							1				1		2	3	7
14	有吉3次										2			2		4
21	有吉4次													1		1
17・21	高沢									1	1	2		2	1	7
4	生浜											6				6
12	南二重堀					2					2	4		7	3	18
22	鎌取場台(1)							2					4			6
	鎌取場台(2)											2		2		4
25	有吉城											5		2	1	8
15	馬ノ口					3					2	1	3			9
13	狐塚										2					2
7	木戸作											1				1
1	椎名崎A										1	3	3			7
35	椎名崎B										9	11		1		21
33	椎名崎C							1	4	7	4			1	18	35
38	神明社裏										7	2			2	11
6	西原						3								1	4
30	叔父名台														4	4
24	富岡						3				1				1	5
27	春日作							1								1
10	小金沢貝塚内											10	4	1		15
8・32	小金沢								1				10			11
8・31	ムコアラク											4	6	6		16
9・26	御塚台												4	9		13
11	六通											2	3	4	1	10
26	六通神社												5	41	1	47
23	太田法師												7	4		11
16	大膳野北												1	4		5
14・29	バクチ穴													8		8
18	鎌取													3		3
計			0	0	0	5	4	7	5	5	34	68	40	100	41	309

表2 古墳の構成

	前方後円墳	帆立貝形前方後円墳	円墳	方墳	単独の埋葬施設	計
前期 I	0	0	0	5	0	5
前期 II	1	0	2	1	0	4
中期 I	0	0	7	0	0	7
中期 II	0	0	4	0	1	5
後期 I	0	0	5	0	0	5
後期 II	3	4	27	0	0	34
終末期 I	0	10	39	6	13	68
終末期 II	1	0	9	28	2	40
終末期 III	0	0	0	100	0	100
不明	2	2	34	3	0	41
計	7	16	127	143	16	309

表3 千葉東南部ニュータウンの集落

報告書No.	遺跡名 時期	集落 古墳	弥生中期	弥生後期	古墳出現期	古墳前期 前期Ⅰ・Ⅱ	古墳中期 中期Ⅰ・Ⅱ	古墳後期前半 後期Ⅰ～Ⅱ古	古墳後期後半 後期Ⅱ新～終Ⅱ	奈良時代	平安時代	不明	計
										終Ⅲ			
2	木戸作1次								21		1		22
3	有吉1次						8	18	37	66	57	1	187
5	有吉2次							7	9	1	5	1	23
6	椎名崎							3	48	35	28	33	147
8	ムコアラク(1)								11	22	13	1	47
9	六通										3		3
9	御塚台(1)								4	4	2		10
10	小金沢貝塚								1				1
11	六通金山								2		2		4
12	南二重堀				12	13	11					11	47
13	上赤塚遺跡(1)										1		1
14	バクチ穴			1						1	6		8
14	有吉3次			1	2	1		1	3	2	2	1	13
14	有吉南								21	1	4	2	28
15	馬ノ口				5	9	2					2	19
16	大膳野北									1	22	5	28
17	高沢						4	42	84	88	102	31	351
18	鎌取					6	22		2				30
20	有吉北								96	2	1	9	108
21	有吉4次		1				1	5	2		7		16
22	鎌取場台				4	1	2					1	8
23	太田法師								6	6	72	11	95
25	有吉城							20	16	2	25	7	70
26	椎名神社		1		3				1	8	3	2	18
26	御塚台(2)								46	22	4	6	78
27	春日作								10	1		3	14
28	今台						3	2	14	12	28	7	66
29	バクチ穴										9		9
30	叔父名台							3	44			4	51
31	ムコアラク(2)								2				2
31	上赤塚遺跡(2)						1						1
32	小金沢古墳群(2)							6	5	1	4		16
33	椎名崎古墳群C									4	19	3	26
34	城ノ台		1		1	17	26	31	39	17	26	41	199
35	椎名崎古墳群B								1		5	1	7
37	六通貝塚									5	5	4	14
38	神明社裏							4	9	11	6	5	35
40	有吉南								8	8	9	1	26
計			3	2	27	47	80	142	542	320	471	194	1828

核を成すことが分かる。この背景には集落の急速な拡大があり、高沢・有吉北・城ノ台・椎名崎・叔父名台・御塚台遺跡など、古墳群に隣接する台地上の集落で竪穴住居が急増している。後期Ⅰを6世紀初頭～6世紀中葉、後期Ⅱを6世紀後葉～末葉とした。なお、後期Ⅱは1986年の分析¹⁾でⅠ期(新)・Ⅱ期としたものである。

古墳時代終末期の様相は近畿地方の王権中心部と関東地方では異なる点が少なくない。前方後円墳の築造が近畿地方よりかなり遅くまで続き、群集墳の構成に前方後円墳・帆立貝形古墳が含まれる例が多いことなどは顕著な違いとして挙げられる。しかし、大型前方後円墳の築造停止に共通の画期を求めることができることから、これを終末期の指標とした。

終末期Ⅰは前代にもまして造墓が活発になり、谷奥部に向かって造墓域が広がっている。この時期に墳丘・内部施設を築いた例は68基(墳丘55基)に及び、造墓の最盛期を迎える。副葬品には鉄製の武器・武具類、装身具類のほか、金銀装の飾大刀・金銅装馬具などが加わり、後・終末期を通じて副葬品が最も充実する時期である。椎名崎古墳群B支群の第2・第3段階が相当する。前方後円墳の新たな築造は行われていないが、後期Ⅱから埋葬が継続する前方後円墳が3基あり、帆立貝形前方後円墳は10基が確認できる。時期の特定できる円墳は39基、方墳が6基あり、方墳の採用によって特徴づけられる時期でもある。

終末期Ⅱになるとさらに谷奥部に造墓域の中心が移動し、ムコアラク(23)・御塚台(24)・六通(25)・太田法師(27)のように前段階とは異なった谷筋に新たな造墓が行われている。著しく変形した帆立貝形のムコアラク1号墳を除いて帆立貝形前方後円墳の築造は行われなくなり、前段階まで主体を占めていた円墳の築造が急速に減少し、替わって方墳が造墓の中心となる。この時期に築造された墳丘で径(1辺)20mを超える例はわずか6例に限られ、10mを下回る例も少なくない。副葬品は馬ノ口5号墳、椎名崎A7号墳を除くとわずかな鉄製武器と玉類にとどまり、質・量共に衰退する。また軟質砂岩を用いた横穴式石室・箱式石棺の構築はこの段階で終了する。終末期Ⅰは7世紀初頭～中葉(1986年分析のⅢ・Ⅳ古)、終末期Ⅱは7世紀後葉～末葉(同Ⅳ新・Ⅴ)と捉えている。

終末期Ⅲは飛鳥時代末以降に営まれた方墳群を区別した。終末期Ⅱからほぼ間断なく造墓されており、前代の古墳群内に数基単位で築かれた例も見られるが、

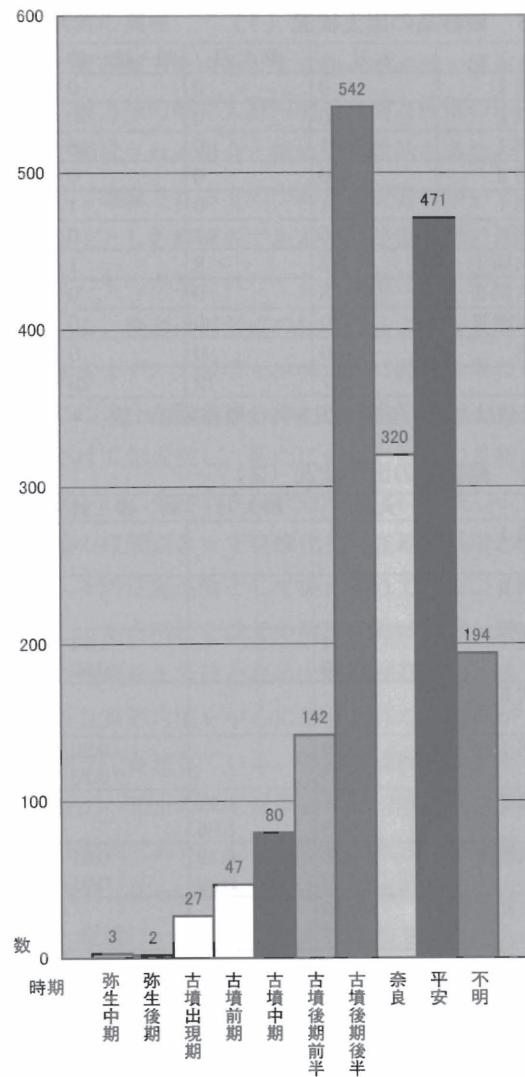


表4 竪穴住居の変遷

新たな造墓域を形成して群在するのが本古墳群の特徴といえる。六通神社南遺跡(26)のように終末期Ⅱの古墳群に隣接して間断なく造墓を展開する例、大膳野北遺跡(28)のように谷筋を変えて造墓を開始する例があり、平安時代前期まで継続している。墳丘中に存在したと思われる木棺直葬系の埋葬施設は極めて検出例が低く、方形の溝だけが残る例が多い。

一方、地下式構造の埋葬施設が当初から採用され、いわゆる有天井土壙と呼ばれている横長長方形の地下式土壙と竪坑の入口部を伴う地下式横穴墓がある。後者は台地上に築かれた横穴墓ともいえる。奈良時代末以降になると、地下の小規模な墓室に火葬骨を納める例も見られる。おそらく、前代から変わらぬ被葬者層によって築かれた方墳群と考えられ、前代から一貫した造墓活動と捉えられる。終末期Ⅲは7世紀末葉～9世紀前葉の例を一括し、前回分析のⅥ期に対応する。

表5 副葬品の出土状況(1)

	大刀	飾大刀	剣・槍・鉞	鉄鏃	刀子	飾り弓	馬具	玉類	装身具
前期 I	0	0	0	0	0	0	0	1	0
前期 II	0	0	0	0	0	0	0	0	0
中期 I	1	0	8	0	0	0	0	3	1
中期 II	0	0	0	1	0	0	0	1	0
後期 I	1	0	1	59	5	0	0	1	1
後期 II	65	4	0	864	45	4	0	23	15
終末期 I	82	8	1	691	54	15	4	24	26
終末期 II	8	0	0	235	15	8	1	7	3
終末期 III	0	0	0	7	2	0	0	0	0
不明	0	0	0	8	0	0	0	0	0
計	157	12	10	1865	121	27	5	60	46

*数値は点数、玉類・装身具は埋葬施設の数 **埋葬施設以外から出土したものは基本的に除いている。

表6 副葬品の出土状況(2)

	大刀	飾大刀	剣・槍・鉞	鉄鏃	刀子	飾り弓	馬具	玉類	装身具
前期 I								0.20 0.20	
前期 II									0.14
中期 I	0.14 0.10		1.14 0.80					0.43 0.30	0.14 0.10
中期 II				0.20 0.20				0.20 0.20	
後期 I	0.20 0.13		0.20 0.13	11.80 7.34	1.00 0.63			0.20 0.13	0.20 0.13
後期 II	1.91 1.05	0.12 0.06		25.41 13.94	1.32 0.73	0.21 0.11	0.03 0.02	0.68 0.37	0.44 0.24
終末期 I	1.21 0.90	0.12 0.09	0.01 0.01	10.16 7.59	0.79 0.59	0.17 0.13	0.04 0.03	0.35 0.26	0.38 0.29
終末期 II	0.20 0.17			5.88 5.11	0.38 0.33	0.20 0.17	0.03 0.02	0.18 0.15	0.08 0.06
終末期 III				0.07 0.07	0.02 0.02				

*上段は古墳1基当たりの数、下段は埋葬施設1基当たりの数

3 時期別の動向

調査した前期 I の古墳は5基、前期 II の例は4基で全体に占める割合はそれぞれ1.6%、1.3%である。その立地は泉支谷の北側と河口低地に臨む台地先端部に限られている。中期も基本的に変わらず、中期 I が7基(2.3%)、中期 II が5基(1.6%)である。このような状況は後期 I 段階まで続いている。ところが、後期 II になると分布域がにわかに拡大し、泉支谷南側の谷奥部で複数の古墳群の造墓が始まっている。総数は34基(11%)に及ぶ。終末期 I はさらに充実して68基(22%)が築かれ、古墳群形成の最盛期を迎える。一連の造墓は終末期 II に終息するが、この段階でも40基(6.6%)の古墳を築いている。新たに造墓域を変えて群形成を始める終末期 III は、遺物が少なく時期の細別が困難なため前代の動向と一概に比較はできないが、方墳100基・32.4%という数字は当地の特質として注目すべきである。

次に、これらの造墓を支えた集落の動向を見てみよう。集落の調査では弥生時代中期から平安時代にわた

る1,828棟の堅穴住居が発掘された。古墳時代出現期から前期の集落分布は極めて希薄で、住居の数は全体の4.0%に過ぎない。まとまった集落は北側と河口低地に面した台地先端部に限られている。中期に至ってもその傾向は変わらず、全体に占める割合も4.4%にとどまる。古墳時代後期になると住居は倍増し、後期前半と捉えられる例が142棟あり、全体の7.8%を占めている。しかし、中期から継続した例が多く、分布域には変化が見られない。数・立地ともに大きく変わるのは後期後半である。堅穴住居は542棟に達し、総数の29.6%を占めている。後期の集落はさらに細別すべきであるが、今回は2分するにとどまった。後期前半と後半の境は、土師器杯の赤彩が黒色仕上げに変わり、長脚の大型高杯が出現する6世紀後葉とし、7世紀末葉の飛鳥・藤原時代まで後期後半に含めている。古墳の時期区分との対応では、集落の後期前半に後期 I と後期 II の古段階、6世紀末葉に至る後期 II の新段階から終末期 II までが集落の後期後半に含まれる。

4 武器の保有率

1986年に160基の古墳が調査された時点で、後期Ⅰ～終末期Ⅱに位置づけられる86基について副葬品の内容を検討した¹⁾。この時、分析の対象とした埋葬施設の検出された古墳は70基、埋葬施設の総数は103基であった。副葬品で最も注目したのは、武器・武具類の出土率が高いことである。古墳1基当たりの出土率は83%、埋葬施設1基当たりでは78%であった。

今回、集計した309基の副葬品の出土状況は表5・6のとおりである。総じて武器類の出土率が高いことは一目瞭然である。後期Ⅰ～終末期Ⅱに該当する147基のうち、埋葬施設が検出された126基、埋葬施設207基について前回と同じように武器・武具の出土率を算出すると、それぞれ69% (87/126)、57% (117/207)であった。墳丘を削平された小規模な古墳の調査例が増えたため前回よりその割合は低くなっているが、装身具の36%・22%、玉類の44%・27%に比べると、1.6～2.6倍の高い出土率を示している。最も出土点数の多い鉄鏃について前回との比較をすると、埋葬施設をもつ古墳1基当たりでは17.1本 (1,196本/70基) → 14.7本 (1,850本/126基)、埋葬施設1基当たりでは11.6本 (1,196本/103基) → 8.9本 (1,850本/207基)となる。鉄鏃の点数は最小数を対象としており、前回推定した最大数1,360本を基準に推定すると、今回の最大数は2,100本を超えるものと思われる²⁾。

主な副葬品の出土状況を時期別に見ると(表5・6)、いずれも後期Ⅱと終末期Ⅰに出土数が集中しているが、飾り大刀・飾り弓・馬具の出土率がほぼ一定であるのに対し大刀・鉄鏃・刀子は後期Ⅰ～終末期Ⅰとその前後では格段の差がある。すなわち、有力被葬者層の数はほぼ変わらないのに対し、大刀・鉄鏃・刀子を装備した構成員の数がこの間に急増していることがわかる。終末期Ⅱには古墳の数自体が減少するが、それにも増して副葬品の出土量・出土率が著しく減少している。

ここで古墳群最盛期の平均的な被葬者像を抽出するならば、後期Ⅱでは大刀1振・鉄鏃14本・刀子1本を装備し、三人に一人は玉類、四人に一人は耳飾りか腕飾りを身につけた人々、終末期Ⅰには大刀1振・鉄鏃8本・刀子1本を装備し、四人に一人は玉類、三人に一人は耳飾りか腕飾りを身につけた人々を想定できる。後・終末期を通じて馬具の出土例が極めて限られているため、特定の有力被葬者以外は弓矢を主要な装備品とする歩兵であったと考えられる。

5 古墳群の構成

さて、近畿地方を中心とする西日本の後・終末期群集墳は、前方後円墳や大型円墳・方墳と多数の小円墳によって構成される場合と極めて等質的な多数の小円墳によって構成されるものがある。前者については大型墳を盟主とした群構成であるが、後期後半には前方後円墳そのものが造られなくなり円墳化して群中に埋没している。後者は群形成の核となるような大型墳を始めから含まず、大型墳とは明らかに墓域を異にしている。このような群集墳の様相は、中期後半から後期前半にかけて急成長し、新たに台頭した有力者層の成立を前提とし、そのような社会的変化に対処しようとする王権の政策によって官僚化した在地首長層とは分離した人々の造墓活動として捉えられてきた。

しかし、本古墳群をはじめ関東における後・終末期群集墳には最後まで核となる大型墳が存在し、前方後円墳・帆立貝形古墳を中心に形成された古墳群が方墳の導入期まで存続している。特に小規模な前方部をもつ墳丘長20～30mの帆立貝形古墳が円墳と共に群在するのは特徴的である。前方後円墳-帆立貝形古墳-小規模な円墳、あるいは方墳によって構成された古墳群は墳形・規模に一定の格差をもっており、しかも内部施設の構造や素材の共通性に密接な関係が窺える。たとえば、本古墳群で16基確認されている後・終末期の帆立貝形前方後円墳は、常陸南部から下総地域に集中して分布する特徴的なあり方を示し、墳丘長30m前後の小規模な例が圧倒的に多く、くびれ部や墳丘裾部の箱式石棺を埋葬施設とするのが特徴である。従来は、地域的特性に視点を置いた分析が行われてきたが、本古墳群では上記のように前方後円墳に次いで高く位置づけられる墳形である。

このような群構成の特徴は、核となる古墳の被葬者と構成員に紐帯が保たれた統治形態を示しているといえよう。また、房総各地では後期Ⅱの段階になって地域の首長墓が再び大型化して前方後円墳を採用しており、これをを頂点に拡大・増加した各地の古墳群が再編成されている。前方後円墳体制が後期に至ってより完成したかのようにあり、新興の有力者層も取り込んだ地域統治の形態が地方首長に委ねられているように見える。この構造の基本単位となる群集墳のほぼ全体を調査・報告した例として、生実・椎名崎古墳群のより詳細な分析は関東地方の後・終末期古墳研究にとどまらず、6・7世紀史を解明する極めて重要な資料となろう。

註

1 白井久美子「東国古墳分析の一視点」-鉄鍔から見た千葉市生実・椎名崎古墳群- 『研究紀要10』 千葉県文化財センター 1986

上記の論考では、後・終末期古墳群出土の鉄鍔をV期に編年し、椎名崎B支群第1段階の剣身形を中心とした両刃系の長頸鍔と比較的刃部の大きな片刃鍔で構成される段階をI～II期(古)、第2段階の両刃系・片刃系共に関が退化傾向にあり無関の長頸鍔が伴う段階をII期(新)～III期(古)、無関の長頸鍔が主体になって造りが華奢になる第3段階をIII期(新)とした。IV期は生実・椎名崎古墳群で広身の長頸鍔が最も多く見られる時期で、多種多様な広身鍔がまとまって出土する傾向にある。長頸鍔は無関の片刃系、小型三角形の刃部をもつものが主体になり、刃部の小型化と軽量化が進む。V期になると副葬品が貧弱になり、鉄鍔の出土量も減少する。無関の片刃系・両刃系、小型三角形の刃部をもつ長頸鍔が主体で、さらに小型・軽量化が進む。

2 これらの鉄製武器類を制作した工房は、調査地域内では発見されていない。多量の武器類が流域の統括首長の管理下で制作され、配布された可能性は考えられる。しかし、中期と終末期II以降の鍛冶工房は集落内で見つかっているため、調査地域外に大量生産をまかなった工房が存在するかも知れない。

文献

- 西嶋定生 1961「古墳と大和政権」『岡山史学』第10号 岡山史学会
- 千葉市史編纂委員会 1976『千葉市史 史料編 原始古代中世』千葉市
- 沼澤豊ほか 1975～2007『千葉東南部ニュータウン』1～38 千葉県文化財センター
- 笹生衛 1987「椎名崎古墳群・人形塚古墳発掘調査概要」-人形塚古墳旧表土上の地割線について- 『研究連絡誌』第19号 千葉県文化財センター
- 上野純司・栗田則久・白井久美子・萩原恭一 1990『房総考古学ライブラリー』5-古墳時代(1) 千葉県文化財センター
- 上野純司・栗田則久・白井久美子・萩原恭一 1992『房総考古学ライブラリー』6-古墳時代(2) 千葉県文化財センター
- 白石太一郎ほか 1992『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集 -東国における古墳の終末- 国立歴史民俗博物館
- 和田晴吾 1992「群集墳と終末期古墳」『新版 古代の日本』5 近畿I 角川書店
- 白石太一郎 2000「畿内における大型群集墳の形成過程」『古墳と古墳群の研究』 塙書房
- 田中新史 2000『上総市原台の光芒』 市原古墳群刊行会
- 白井久美子・西野雅人 2003「生実・椎名崎遺跡群」『千葉県の歴史 資料編2』-考古2 弥生・古墳時代- 千葉県
- 白井久美子 2004「前方後円墳」『千葉県の歴史 資料編4』-考古4 遺跡・遺構・遺物- 千葉県